

権田直助の靈魂論

魂の働きと養い

土屋久（共立女子大学、順天堂大学兼任講師）

はじめに

国学者の平田篤胤（安永 5 年 - 天保 14 年 [1776 - 1843]）が『靈の真柱』の冒頭で、「古学する徒は、まず主と大倭心を堅むべく、（中略）その大倭心を、太く高く固めまく欲するには、その靈の行方の安定を、知ることなも先なりける」と述べて、国学をする者にとって、死後の世界における安心の必要を説いていることは周知の通りである。こうした靈魂と死後の世界に関する考察は、篤胤以後、平田派の国学者を中心にさまざまに論じられ、多様化していく。

本稿で考察の対象とする権田直助（文化 6 年 - 明治 20 年 [1809 - 1887]）の靈魂論も思想史的には上記の系譜の中に位置づけられる。彼は平田篤胤に直接師事し、江戸後期から明治にかけての激動の時代を、医師、国学者、政治運動家、神道家として活躍した人物である。その生涯については後述するが、直助は篤胤の説を下敷きにしながらも、医学や政治、宗教といった実践と関わる活動を通して自身の靈魂論を彫琢していく。彼は師篤胤と同様、死後の靈魂の行方について述べると同時に、靈魂の分類とその働き、靈魂と人の生死、靈魂の養い方等を説いている。

本稿では、直助の靈魂論の骨子を纏めつつ、その今日的な意味での先駆性を指摘しておきたい。